

J **apanese text**

2016年 春/夏号 日本語編

Works

氷

画・文＝篠田桃紅

p.009

ゆうずむげ
 融通無碍に流れる水が、ある瞬間に氷になる。
 それはもう、ほんの一瞬のこと。
 冷たく硬く、流れもしない、形を持った氷になる。
 あまりに違うものに、瞬時に変容するこの不思議。
 水であって氷である。同じものだけれど同じではない。
 とても身近なものなのに、なんと神秘的な。

口絵

滝は生きている

写真・文＝永瀬嘉平

p.010

悠久の昔から響く水音、天から降り注ぐ清冽な流れ。神聖なる神の依り代として民に畏れられてきた日本の滝。しかし今、その姿は急激な開発によって変わりつつあるという。40年にわたり滝を追い続けてきたナチュラリスト、永瀬嘉平氏が鳴らす警鐘に耳を澄ませよう。

白糸の滝

富士山の伏流水が絹糸を引くかのように優美に落ち下る。高さ 20 m、幅 200 m にわたって流れ落ちるこの滝は、「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」の構成資産の一部として世界文化遺産に登録されている。(所在：静岡県富士宮市)

p.012

**太古の昔、人々は、山に森に木に、
 そして滝に神様を見た**

日本各地に滝を求め歩いて40年、1000を超える滝を写真に収めてきた。滝を前にするとき、私はいつも大きな畏怖の念に打たれる。それは太古の先祖が感じていたアニミズムの意識が、現代の私にも受け継がれているからかもしれない。

天上の神は、目立つものに降りてくるといわれる。高い山、岩、常緑の巨樹、そして滝。それらは神の依り代であり、人が足を踏み入れてはならない神聖なものだった。神は清浄無垢なる滝の流れとなり竜神として滝壺にすまわれた。そうした信仰から多くの滝壺伝説が生まれた。こんな伝承がある。木こりが滝壺に斧を落とし、それを拾おうと水中に潜ると乙女が機を織っている。「ここで目にしたことは決して口外しないでください」と言われて斧を取り戻すが、ある酒席でそのことをしゃべった途端、木こりは家もろとも空高く飛ばされてしまった。また滝壺にすむ竜神は雨をつかさどる神でも

あった。^{かんぼつ}早魃にあえぐ農民が遠くから滝壺の水を取りに行き、その“貰い水”を田畑にまくと、途端に雨が降ったとか、竜神が嫌う金物(寺の鐘など)を神聖な滝壺に投げ込むと、竜神が怒り狂って雨を降らせたという話もある。

しかし滝がもつその神聖さは、時代とともに薄れつつある。急ぎすぎる開発、観光化によって森を壊し、滝を汚して造られた道路や橋。動植物の生活サイクルを乱すようなライトアップ——。互いに恵みを分かち合い、共生して命を長らえてきた自然が死んでしまえば、自然の一部である我々人間も死に至る。そのことをもっと謙虚に知るべきだと私は思う。昔の人々が山に、森に、滝に神を見たのには、それなりの理由があるはずなのだ。

羽衣の滝

北海道一の大瀑布。日本で第3位の落差を誇る滝で、270mもの高さから7段になって落ち下る様が、まるで天女が羽衣^{ひるがえ}を翻して舞う姿のように見えることから命名されたといわれる。(所在：北海道上川郡)

(p.013)

^{あきう}秋保大滝

蔵王国定公園および県立自然公園^{ふたくち}二口峡谷地域内を流れる名取川の全流が、落差55m、幅6mで一気に流れ落ちる。その豪快さと左右に張り出す巨岩とのコントラストが圧巻の景観を生む。(所在：宮城県仙台市)

^{ひがししいや}東椎屋の滝

断崖絶壁を断ち割るように垂直に水が落ちてくる、落差85mの端麗な滝。古くから観音信仰の霊場となっている。その景観が日光の華厳の滝に似ることから「九州華厳」の別名ももつ。(所在：大分県宇佐市)

永瀬嘉平 (ながせ・かへい)

ナチュラリスト。1940年東京生まれ。日本大学法学部新聞学科卒業後、毎日新聞社記者を経てフリーに。日本全国の巨樹や滝を巡る。著書に『かくれ滝を旅する』(世界文化社/現在絶版)『百木巡礼』(佼成出版社)など多数。